

するにむかしより如斯ありしにや、古今著聞集卷十六興言利口ノ部壬生二品家隆の家にて、ある人の子を男になす事侍り、略中名をば何とか付けべきなど沙汰しけるを、貞丈云、エホシチヤガ、エあつみの三郎爲俊といふ田舎さぶらひ聞て、進み出て言けるは、此殿が貞丈云、此殿トハ家隆御一家は、みな隆の字をなのらせ給へば、いへたかどや付参らせらるべけん、ゆゑ、しくはからひ申たりげにいふを、人々わらひの、しる事がぎりなし、爲俊が父圖書允爲弘聞て、いかに汝ふしぎをば申ぞ、殿の御名乗をしりまいらせぬか、略中といはれて、さも候はず、殿の御名のりをば、かりうとこそえり参らせて候へ、世にも亦さこそ申候なれとぞ陳じたりける、略中是常に自他共に、カリウとのみ云習したるゆへ、爲俊が、イヘタカと云事をば、知らざりし也、名を音に唱ふることは、上古にはなかりし也、人丸を、ニングハンといはず、赤人を、シヤクニンと云はず、是にて知るべし、時平大臣を、シヘイノオトと云ひ傳へたるは、延喜の頃よりの云習はし歟、さらば其頃より、音に唱る事ありし歟、

〔玉勝間九〕人名を文字音にいふ事

人の名を、世に文字の音にて呼ならへる事、ふるくは時平、大臣、多田、満仲、源、頼光、安倍、晴明などのごときありや、後には、俊成卿、定家卿、家隆卿、鳴、長明など、もはらもじごゑにのみいひならへり、琵琶ほうしの平家物語をかたるをきくに、つねにはさもあらぬ、もろくの人の名ども、おほくはもじごゑに物すなるは、當時ことに、よの中にさかりなりしことなめり、

〔江談抄二〕天曆皇帝上村問手跡於道風事

天曆皇帝、召道風朝臣、勅云、我朝上手誰人哉、申云、空海、敏行、時人、難云、於大師御名、可奏音讀也、敏行ヲバ、猶止志由岐止奈牟可奏云々、

〔平家物語一〕祇園玄やうじやの事